

「帝王学」の神髄は、部下をして社長に惚れ込み、命を捧げることも惜しくないと思わせることと云えましょう。

一方、社長は、社員の為なら、いつでも命を投げ出す覚悟があること、即ち、常に正々堂々と生きていることが、自らの人生観、仕事観として確立していることでしょう。

こうなれば、会社は、形だけの経営計画書や、利益計画は無くとも、自然に成長発展するものです。

何より重要なことは、社長と社員の心のつながりであり、**人生意気に感ずという信頼関係**です。

森信三先生が、「二校に二人の同志ができれば、その学校は必ず動き出すと言ってよい」と云われています。日々、経営の現場を見ている会計人として、正に我が意を得たり、と深く実感する言葉です。

**会社に三人の同志ができれば、その会社は必ず動き出すものです。**

社長は、ついつい社員全員が、自分の方を向いてくれることを期待するものです。

しかし、生まれも、育ちも、考え方も、年齢も違う社員が、社長が言ったことを、そのまま受け入れてくれる程、生易しいものではありません。

先ず、自分を含め「三人の同志」を創ること。酒を酌み交わし、熱く人生を語ること。仕事の意義を説くこと。素晴らしい未来があることを信じてもらうこと。

そして、一般論で言われる組織論「二対六対二」の法則に当てはめることです。

上の二割を、社長の同志にすることです。

社長の魅力を磨き、高めることに大変な時間とカネとエネルギーを使うことになりましたが、これを厭うと成功しません。

これも森信三先生の言葉ですが「**正師を草を分けても探し求むべし。人生の意義というも、ついにこの一事の他ならむ**」と語っておられます。これが第一。

そして、**第二に、いい仲間、いい友を持つこと。**語り合って伸びる仲間です。古人は、友を択ぶべしと語っていますが、世間には悪友の方が多いいからでしょう。

そして、**最後は「読書尚友」**です。こうして、社長は、人間的幅ができ「人格者・人物」と呼ばれるようになれば本物です。

意識せずに、良い社員が集まって来てくれます。数字を示さずとも、売上は伸び、利益も出ます。社長の器以上の会社はありません。結局、社長の器を如何に大きくするかです。「帝王学」を身に付けましょう。

今月のポイント

仕事Ⅱ人生Ⅱ極楽

